

仙覚の軌跡（二）

鎌倉比企谷の新釈迦堂

仙覚は、現在の小川町の地に滞在して、『万葉集註釈』を著した鎌倉期の僧侶である。仙覚は、常陸国（茨城県）に生まれて、宇都宮歌壇の文化圏で成長することで、『万葉集』に興味を持ったと考えられる。以下では、仙覚が『万葉集』の研究を進めた鎌倉の拠点について考察してみたい。『西本願寺本万葉集』巻一奥書によれば、寛元 4 年（1246）12 月、仙覚が「相州鎌倉比企谷新釈迦堂僧坊」で『万葉集』を書写したという。また、『万葉集註釈』巻二奥書によれば、仙覚は完成させた自筆本を「鎌倉比企谷」に保管していたようである。したがって、仙覚は、鎌倉の比企谷にあった新釈迦堂（現在の妙本寺）に在住して、『万葉集』の研究を進めていたと推定される。

竹御所と新釈迦堂

鎌倉の比企谷は、武蔵国の有力御家人である比企氏の拠点がある地だった。比企氏は、建仁 3 年（1203）に比企氏の乱で滅亡したが、比企能員の孫娘に竹御所と呼ばれる女性がおおり、鎌倉幕府の二代將軍である源頼家の娘として、御家人社会で絶対的な影響力を持っていた。竹御所は、四代將軍の九条頼経と結婚したが、天福 2 年（1234）7 月、難産のために死去して、比企谷の新釈迦堂に埋葬された。竹御所の墓所が比企谷に営まれたのは、彼女が比企氏の子孫だった因縁によるのだろう。仙覚が拠点とした比企谷の新釈迦堂は、竹御所を供養する寺院だったのである。

新釈迦堂と天台宗

では、常陸国に生まれた仙覚は、どのような経緯によって、比企谷の新釈迦堂に入山したのだろうか。建長 5 年（1253）12 月の『仙覚奏覧状』によれば、仙覚は「慈覚門人」と署名しており、慈覚大師（円仁）の法灯を継承する天台宗の僧侶だったことが判明する。また、比企谷の新釈迦堂は、天台山門派の影響が強く及んだ寺院だったと考えられている。したがって、仙覚が新釈迦堂を活動の拠点とした背景として、天台宗のネットワークが存在したことは間違いないだろう。

竹御所と宇都宮歌壇

ただし、東国にも数ある天台宗の寺院の中で、仙覚が比企谷の新釈迦堂に止住した背景には、両者を結びつける必然性があったと想定される。この問題に対する解釈として、仙覚を比企氏の出身とする説もあるが、ここでは竹御所と宇都宮歌壇との間に結ばれていた関係に注目してみたい。【史料 1】は、宇都宮歌壇の歌集である『新和歌集』に収録された藤原重頼の娘の歌である。

【史料 1】『新和歌集』巻第六哀傷 488（『新編国歌大観』第 6 巻、角川書店）

竹御所かくれさせ給ひてのち、常の御所にまゐりてよみ侍る

藤原重頼女

四八八 いかばかり なみだもちりも つもるらん 君なきとこの ふるき枕に

詞書によれば、藤原重頼の娘は、竹御所が他界した後、その死を哀悼して歌を詠んだという。また、寝室に参じて故人を偲んでいる点から、竹御所の身边に仕えて世話する女性だったと考えられる。宇都宮歌壇で活動する人々は、竹御所と生前から親密な交流を続けており、没後に営まれた供養にも参加していたと推測される。とすれば、宇都宮歌壇に所属していた仙覚は、竹御所を供養する住僧の一人として、比企谷の新釈迦堂に身を置くようになったのではないだろうか。

新釈迦堂における仙覚

このように、仙覚は、宇都宮歌壇のネットワークも利用して、竹御所を供養する新釈迦堂に導かれたと考えられる。「相模文書」には、弘安 6 年（1283）12 月の関東下知状が伝わっており、比企谷の新釈迦堂に「仙玄阿闍梨」という供僧がいたことを確認できる。この仙玄という法名は、仙覚と「仙」の字が共通するので、同じ法脈に連なる僧侶だったと解せられる。そして、新釈迦堂の仙玄が、かつて仙覚のもとで修行していたと仮定すると、仙覚も供僧という立場で活動していた可能性が高いだろう。常陸国の出身だった仙覚は、東国における政治文化の中核である鎌倉に進出して、比企谷の新釈迦堂を拠点としながら、『万葉集』の研究に邁進していったのである。